

1 教育目標

- よ よく考える子
- ◎い いつも元気な子
- こ こころ豊かな子

2 目指す学校像

目指す学校像を

- 子どもたちが「学びたくなる学校」
- 保護者が「通わせたい学校」
- 地域が「誇りに思う学校」
- 教職員が「勤めたい学校」

3 今年度の合言葉 「一歩踏み出す」

今年度も自己肯定感の育成を中心に置いた学校経営を行った。

自らの課題に気付き、解決に向かって「一歩踏み出し」課題を解決することによって自己有能感を高める。また、解決できなくても失敗から学ぶ、教師は児童に寄り添い、意図的計画的な指導を行うことで自己肯定感を高めていくことができたこと、児童の多くの活動の様子、行動、発言から考える。

自己肯定感に関して、校内研修会でも共通理解を図るべく研修会を行い、教職員の自己肯定感への認識が高まった。

4 令和7年度の取組目標と方策（本年度の達成課題）

(1) 子どもたちが「学びたくなる学校」

※ 今年度は特に不登校解消に向けて昨年度以上に取り組む。

→ 0にはできなかったが、SSW、専門家のアドバイスを受けるなど、今まで+αの関係機関と連携し、解消に向けた進展も見られた。

①特別な支援が必要な子どもたちへの指導・対応。（学校サポーター等の活用）

→ 保護者との連携を密にとり、教育委員会（教育指導課・特別支援担当、就学相談担当）等多くの関係諸機関と連携対応し、効果をあげたものも多数あった。

②分かる授業・落ち着いた学習を進める。（めあての明確化）

→ 各授業でめあてが明確に示され、スモールステップを用いる等「分かる授業」の実現に向けて努力を行った。

→ 教科担任制の導入により、児童はより良い授業を受けられ、理解度が高まった。

学級担任以外からの指導を受けることで、様々なタイプの教員と接し、困ったことなどは自分に合った教員に相談することができやすくなった。

教員側も、教科数が限られるので深く教材研究でき、同じ内容の授業を複数回行うことで指導力も高まった。

③体力向上・保健指導・食育など、総合的に健康教育を推進することで、生涯にわたり心

身ともに健康な生活を送るための基礎を培う。（体育的活動、検診時の保健指導、食育等）

→ 健康教育は養護教諭中心に行い、学校医、学校薬剤師等多くの皆様のご指導を仰ぐことができた。体力向上では、持久走・なわ跳び週間、トップアスリートを招聘しての体育の授業等も行えた。

④交通事故0 いじめ0を目指す。

→ どちらも発生してしまっただが、連携を密にとり（家庭・教育委員会）、ベストの対応ができたと自負している。

→ 毎週木曜日のいじめ対策委員会を実施し、全教職員での情報の共有や素早い対応、年3回のいじめ研修の充実により、その対策方法を学ぶことができた。

⑤縦割り班活動のさらなる充実を図る。年間を通して活動を行う。

→ 高学年の意識向上をいっそう図ることができた。低学年も、高学年児童に憧れをもち「将来の自分のモデル像」をもつことができたと考える。

⑥一人一台端末の有効活用を行う。

→ 今年度、校内研究の3つの柱の一つとして、研究に取り組んだ。研究の成果や課題を、次年度以降にさらに活かしていく。

(2) 保護者が「通わせたい学校」

※ 安心安全な居場所づくりとして、放課後子ども教室の拡充に力を注ぐ。

→ 「朝の」放課後子ども教室についてアンケート調査を行いニーズが一定程度あることが分かった。実現に向けて、関係各所（放課後委員会・教育委員会・ボランティア）と連携を取り始めている。

①学級の荒れ0 体罰0 服務事故0を目指す。

→ 0で終わった。

→ 学級で抱え込まないように、学年が学校全体など組織的な対応を心がけた。経験の少ない教員への助言や支援も心がけ、未然に対応した。

②保護者からの苦情対応を的確に行う。

→ すぐに改善できる点は改善を図った。（特に登下校上の課題等警察等関係各所と連携した。）

③国（6年）市（4～6年）各学力調査で、市の平均点以上を目指す。

→ 全国（6年）国語で市の平均以上、市（4～6年）では、5・6年の国語と算数で、市の平均以上をとることができた。

(3) 地域が「誇りにしたくなる学校」

※ いっそう、地域から愛され「応援したくなる学校」を目指す。

①学運協、町会・自治会等とのスムーズな連携を行う。

→ 多くのご支援をいただいた。学運協、町会・自治会等とのスムーズな連携のため積極的にイベントや行事等に参加した。

②地域教材や人材の活用 子どもたちの生活に根ざした学習活動を取り入れる。

→ 地域の指導者を招聘し、プログラミングの授業を行い、コンテストでの入賞者を出

し、学校表彰も受けた。東京高専との連携授業、防災教育、マーチングフェスタ、星空を見る夕べ、凧作り・凧揚げ等々地域等と連携し非常に多くの活動を今年度も行い、子どもたちの興味関心を広げる努力を行った。

(4) 教職員が「勤めたくなる学校」

※ 働き方改革の一層の推進を行う。

- 教材研究日の設置（児童の受け皿は放課後子ども教室の原則毎日実施）
- 研究日システムで年休を取得しやすく。ランチミーティングで勤務時間の有効活用。
- 教科担任制の教員側のメリット（前述）

①もしもの時のサポート体制がとれる学校。

- お互い様で、緊急時に休みがとれるよう助け合って勤務できた。
- 専科教員委による副担任の協力体制を構築し、どの学年も3人ずつの教員でチームワーク良く運営できた。

②校内研究の充実。公開授業を見合う機会を設ける。

見せ合い学び合い、ともに成長し、ともに達成感を味わい絆感が深められる学校。

- 昨年度は都の研究指定校としてその責務を果たした。今年度は自分たちの取り組むべき課題3点を取りあげ、講師等の指導を受けそれを実践するスタイルとし、より成果をあげることができた。

- 自己肯定感の育成を校内研の大きな目標に掲げ研修の充実を図った。

校長を講師として自己肯定会への理解を深めた。教職員も常に意識するよう心掛けた。

③努力が報われ、すぐに結果は出なくとも「努力は裏切らない」と信じられる学校。

- 今、自分にできるベストを考え、そして実行し、お互いにたたえ合い高め合うことができたと考える。